

賢治童話のタイトルのことならおもしろい。

半 はん
沢 ざわ
幹 かん
一 いち

1

童話とは、「童」つまり子供が作った話ではなく、子供が読む、あるいは子供に読み聞かせる話のことである。つまり、子供を読者層とするという点に特色を持つ文学ジャンルであり、その点に配慮した表現・内容を具える。表現としては、たとえば平易な表記、日常的な語彙、優しい言い回しなど、内容的には、イメージしやすい設定、共感しやすいキャラクター、そして何がしかの教訓性あるいは啓蒙性などである。

昔話やお伽噺ではない、いわゆる創作童話が日本で書かれ始めたのは、大正期の雑誌「赤い鳥」以降とされるが、宮澤賢治の童話創作者もその頃に始まったと見られる。賢治童話は彼の没後に人気を得ることになり、「銀河鉄道の夜」「注文の多い料理店」「風の又三郎」などの作品によって、今や日本の代表的な童話作家の一人として確固たる地位を占めている。

賢治童話は、文学的にはもちろん、言語的にもさまざまに研究され、中でも彼の造語とりわけオノマトペには強い関心が寄せられてきた。しかし、文学的にも語学的にも、賢治童話のタイトルに着目した研究は、寡聞にして知らない（事は賢治一人に限らないのであるが）。取るに足りない問題ならばそれもまた当然であるが、そもそもその検証さえされていないせいでしたら、まずは取り上げて

みただけの価値はあると考える。

その際、童話というジャンルにおけるタイトルが文学一般の中にもどのよう位置付けられるか、そのうえで賢治童話のタイトルの独自性がどのように認められるかが問われることになるであろう。賢治童話については、その創作・推敲の過程の全貌がほぼ明らかになっていることもあり、その過程におけるタイトルの変更も手掛かりになると予想される。

2

【新】校本宮澤賢治全集（筑摩書房、1995年）の第八巻から第十二巻までに収められた、「童話」に分類されている作品は、未発表あるいは未完成の分も含めて、89編ある。ただし、この数は全集に収載されたテキストの総数ではなく、全集で同一のあるいは関連する作品と認められれば、複数のバージョンがあっても、それを1編とした計算による。このうち、タイトルの不明な作品が7編あるので、対象とする作品は82編、タイトルも82例となる。

この82編のうち、タイトルが1種なのが72編で、全体の9割近くに及ぶ。

72編の中で、草稿あるいは初期形（あるいはその複数の一部）ではタイトルがなかったのに、改稿された際に新たにタイトルが付された作品が以下の6編である。

銀河鉄道の夜・グスコープドリの伝記・タネリはたしかにいちにち囃んでゐたやうだった・チュウリップの幻術・ポラーノの広場・マグノリアの木

元からタイトルがあり、改稿されてもタイトルが変わらなかった（表記の違いは無視）のが、以下の7編である。

かしはばやしの夜・月夜のけだもの・畑のへり・ひのきとひなげし・葡萄水・山男の四月・やまなし

一方、タイトルに変更があったのは10編で、以下のように変更された（上が変更後）。

風（の）又三郎↑種山ヶ原・さいかち淵
ポラーノの広場↑毒蛾

北守將軍と三人兄弟の医者↑三人兄弟の医者と北守將軍

寓話 猫の事務所↑猫の事務所

一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録↑ビヂテリアン大祭

まなづるとダアリヤ↑連れて行かれたダアリヤ

榎の木大学士の野宿↑青木大学士の野宿

蛙のゴム靴↑蛙の消滅

寓話 洞熊学校を卒業した三人↑蜘蛛となめくじと狸

マリヴロンと少女↑めくらぶだうの虹

この中で、「風〔の〕又三郎」というタイトルの作品は、「種山ヶ原」と「さいかち淵」の2編が取り込まれたものであり、「ポラーノの広場」と題された作品も「毒蛾」という作品がその一部となったものであるから、テキスト自体の大幅な改変に伴うタイトルの変更に見られる。「北守將軍と三人兄弟の医者」は語順の入れ替えであり、バージョンによって文体や構成の違いがあるが、中心人物の捉え方の変更によるものと推定される。

「寓話 猫の事務所」「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」「まなづるとダアリヤ」「榎の木大学士の野宿」「蛙の消滅」の5タイトルは元のタイトルの一部が残っているのに対して、「寓話 洞熊学校を卒業した三人」と「マリヴロンと少女」の2タイトルは、元のタイトルの痕跡をまったく残していない、全面的な変更である。

3

82例のタイトルを、その表現構成によって分類すると、以下のようになる。

名詞 …… 20例 (24・3%)
名詞+の名詞… 38例 (46・3%)

賢治童話のタイトルのことならおもしろい。

名詞＋と＋名詞	10例	(12・2%)
その他の名詞句	10例	(12・2%)
名詞＋名詞句	2例	(2・4%)
その他	1例	(1・2%)
1文	1例	(1・2%)

2例を除き、賢治童話のタイトルはすべて名詞止めであり、そのうち、「名詞＋の＋名詞」が全体の約半数を占める。名詞止めの作品タイトルは文学作品においてはごくごく一般的であって、その点でとくに目を引くところはない。ただ、「名詞＋の＋名詞」という表現構成に集中している点は、あるいは賢治童話の特徴的傾向と言えるかもしれない。

以下に、各分類に該当するタイトルの一覧を示す。

〔名詞〕

谷・車・台川・雪渡り・葡萄酒・化物^{ばけもの}丁場^{ちやうば}・二十六夜・やまなし・黒ぶだう・「ツエ」ねずみ・クンねずみ・茨海小学校・革トランク・おきなぐさ・虔十公園林・イギリス海岸・とっこべとら子・さるのこしかけ・カイロ団長・一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録

〔名詞＋の＋名詞〕

畑のへり・風〔の〕又三郎・ポラーノの広場・チュウリップの幻術・馬の頭巾・グスコープドリの伝記・マグノリアの木・双子の星・貝の火・いてふの実・よだかの星・十月の末・ひかりの素足・二人の役人・黄いろのトマト・林の底・インドラの網・雁の童子・ガドルフの百合・バキチの仕事・イーハトーブ農学校の春・耕耘部の時計・四又の百合・なめとこ山の熊・セロ弾きのゴーシュ・鳥の北斗七星・水仙月の四日・山男の四月・月夜のでんしんばしら・鹿踊りのはじまり・氷河鼠の毛皮・ざしき童子のはなし・月夜のけだもの・かしはばやしの夜・蛙のゴム靴・十力の金剛石・銀河鉄道の夜・梢ノ木大学士の野宿

〔名詞＋と＋名詞〕

マリヴロンと少女・まなづるとダアリヤ・氷と後光・ひのきとひなげし・サガレンと八月・どんぐりと山猫・

シゲナルとシゲナレス・オツベルと象・土神ときつね・鳥箱先生とフウねずみ

〔その他の名詞句〕

みぢかい木べん／気のいい火山弾／鳥を取るやなぎ・毒もみの好きな署長さん・注文の多い料理店・学者アラムハラドの見た着物・朝に就ての童話的構図／北守將軍と三人兄弟の医者・狼森と笹森、盗森・よく利く薬とえらい薬

〔名詞＋名詞句〕

寓話 猫の事務所・寓話 洞熊学校を卒業した三人

〔その他〕

紫紺染について

〔一文〕

タネリはたしかにいちにち囃んでゐたやうだった

各タイトルの長さを、長単位の自立語（文節）数で見ると、「名詞」20例はすべて1語、「名詞＋の＋名詞」および「名詞＋と＋名詞」合わせて48例はすべて2語、「その他の名詞句」では、2語が1例、3語が8例、5語が1例、「名詞＋名詞句」では、3語が1例、4語が1例、「その他」では2語、そして「一文」は5語、となる。

語数ごとに集計すると、1語のタイトルが20例、2語が50例、3語が9例、4語が1例、5語が1例となる。延べ156語で、1タイトル平均が約2語である。一覧どおり、1語1タイトルでも、「谷」という単純語から「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」のように多数の要素から成る複合語まで、単語自体の長短差はあるものの、語数としては、全体的に賢治童話のタイトルは短かめと言える。

賢治童話のタイトルの中で、表現構成として唯一異色なのが、「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった」である。1文から成るというだけでなく、もつとも長く、しかもあたかもテキストから抜き出したような、それだけでは意味不明なタイトルである。まずは、このタイトルについて、テキストとの関係から、いささか考えておく。

当作品は全集で8頁分の長さであるが、その最後の場面、母親と男の子・タネリとの次のような会話のやりとりがある（引用は全集による。末尾の数字は巻数・頁数。以下も同様であるが、次例以降は本文のルビは省く）。

「藤蔓みんな噛ちつて来たか。」

「うんにゃ、どこかへ無くしてしまつたよ。」タネリがぼんやり答へました。

「仕事に藤蔓噛みに行つて、無くしてくるものあるんだか。今年はおいら、おまへのきものは、一つも編んでやらないぞ。」お母さんが少し怒つて云ひました。

「うん。けれどもおいら、一日噛んでゐたやうだつたよ。」

タネリが、ぼんやりまた云ひました。

「そうか。そんだけいい。」お母さんは、タネリの顔付きを見て、安心したやうに、またこならの実を搗きはじめました。

(10・82)

予想どおり、この異色のタイトルが、タネリの最後の科白「おいら、一日噛んでゐたやうだつたよ」から採られたことは、明らかである。異様なのは、タネリ自身のことなのに、「やうだつた」と他人事のように表現していることである。その言い方が「ぼんやり」であることも、繰り返されている。

当テキストは、自宅の小屋の出口で、藤蔓を棒で叩く作業をしていたタネリが、遠い風景に魅せられて、「叩いた蔓を一束もつて、口でにちやにちや噛みながら、そつちの方へ飛びだ」すところから、始まる。そして、「そつち」でのさまざまな出会いを経て、夕方

急いで帰って来て、先の場面に至る。

その間、「それから思ひ出したやうに、あの藤蔓を、また五六べんにちゃにちゃ噛みました」、「タネリは、柔らかに噛んだ藤蔓を、いきなりぷつと吐いてしまつて」、「また藤蔓を一つまみとつて、にちゃにちゃ噛みはじめながら」、「タネリはおもはず、やつと柔らかなりかけた藤蔓を、そこらへふつと吐いてしまつて」、「やつと安心したやうに、また藤の蔓をすこし口に入れて」、「タネリは思はず、また藤蔓を吐いてしまつて」、「藤蔓を一つまみ噛んでみても、まだなほりませんでした。そこでこんどはふつと吐き出してみましたら」、「そしてさびしさに、また藤の蔓を一つまみとつて、にちゃにちゃと噛みはじめました」、「タネリは、いま噛んだばかりの藤蔓を、勢よく草に吐いて」、「タネリは、ほんたうにさびしくなつて、また藤の蔓を一つまみ、噛みながら」のように、何かと出会うたびごとに、その後で、藤蔓を噛むことと吐くことが反復されている。

その限りで、藤蔓を「一日噛んでみた」のは、テキスト上の事実である。にもかかわらず、「やうだった」と「ぼんやり」としか語れないのは、その行為がほぼ無意識だったからである。そして、その無意識はその日のタネリの体験が現実とは思えないということにつながる。それに対して、「そうか。そんだけいい。」と応じる母親も、不思議と言えば不思議であるが、賢治の童話ワールドならではの設定・展開と言えよう。

この作品の「タネリはたしかにいちにち噛んでみたやうだった」というタイトルは、テキストに描かれる非現実的な世界や出来事に関して、他の作品とは違つて、その非現実感を登場人物自身が覚えてしまつていふことを、いわば剥き出しの形で表そうとしてみたものと考えられる。タネリの科白に対し、タイトルにおいて「タネリは」と「たしかに」という表現が付加されたのは、そのことを語り手もまた追認していることを示す。ただ、それはテキストを読んだうえででなければ、判断しかねることであるが。

ちなみに、この作品には、分量がほぼ半分ほどの初期形があり、全集では〔若い木霊〕と仮題が付けられている。その仮題どおり、当該テキストでは擬人化された「若い木霊」のエピソードが中心であつて、タネリも藤蔓もまったく出てこない。つまり、「タネリはたしかにいちにち噛んでみたやうだった」という異色のタイトルは、テキストの改変・増補に伴つて、付されたということである。

対象とする賢治童話のタイトルの特徴を、それらに用いられた単語から見てみる。

延べ156語のうち、名詞以外は、次に示す15語(約9%)にすぎない。しかも1語(就く)以外はどの語も1回ずつの使用であり、品詞にも意味分野にも、取り立てるべき点はとくに見当たらない。

嘯む・利く・卒業する・就く(2)・とる・見る・ある(動詞)／いい・えらい・多い・みぢかい(形容詞)／
好きだ・たしかだ(形容動詞)／よく(副詞)

名詞は残りの141語で、7語が2回ずつの使用なので、異なりは134語となる。複数回使用の名詞は以下のとおり。

寓話(寓話 猫の事務所・寓話 洞熊学校を卒業した三人)・薬(よく利く薬とえらい薬)・蛙(蛙のゴム靴・蛙の消滅)・月夜(月夜のけだもの・月夜のでんしんばしら)・夜(銀河鉄道の夜・かしはばやしの夜)・星(双子の星・よだかの星)・百合(ガドルフの百合・四又の百合)

1語のタイトルでの重複は見られず、複数語のタイトルでも、その一部が重複するだけである。これは、賢治童話の作品タイトルはすべて固有名として、他作品との識別機能を果たしているということである。

重複する語の中で、「寓話」は2例とも、改稿後に付加された語であり、「薬」は唯一、同一タイトル内での反復で、その他は「名詞＋の＋名詞」という表現構成の中に現われ、後続の名詞のほうに重複が多い。内容的には、「寓話」と「薬」を除けば、他はすべて自然分野に関する語彙であり、とくに「月・月夜・星」という夜の時間帯に関わる語が目立つ。

名詞語彙全体において特徴的なのは、次の3点である。

第一に、固有名が多いことである。134語のうちの55語、約4割が相当する。タイトル単位で見ると、82例のうちの59例(約72%)に、固有名が含まれる。固有名といっても、個別名から種属名まで、特定性には程度差があるが、一般語とは異なり、具体的な対象を表す語がタイトルによく用いられているということである。これは、童話という文学ジャンルを考えれば、イメージを

喚起しやすくするためと考えられる。

第二に、その固有名には、賢治の造語と見られるものが目立つということである。以下に、便宜的に分野に分けて、挙げてみる。

〔動物〕 クンねずみ・フウねずみ・「ツエ」ねずみ・氷河鼠・とっこべとら子・カイロ団長

〔自然〕 台川・イギリス海岸・狼森・箕森・盗森・虔十公園林・水仙月

〔人工〕 ポラーノ・イーハトーボ農学校・茨海小学校・洞熊学校・銀河鉄道・シグナレス・化物丁場

〔人物〕 学者アラムハラド・オツベル・ガドルフ・グスコープドリ・ゴシユ・タネリ・バキチ・マリヴロン・又三郎・鳥箱先生・檜ノ木大学士・北守將軍

これらには、賢治が学んだエスペラント語に由来すると見られる造語と、生地・花巻の地元の言葉に由来するであろう造語が多く含まれている。

第三に、意味分野を自然と人事に二分すると、自然のほうが多いということである。これが何を意味するかといえ、タイトルが、主題であれ、主人公であれ、素材であれ、舞台であれ、作品に関わる何を表すにしても、自然が人事以上に取り上げられているということである。

たとえば、名詞単独のタイトル20例を見てみると、自然分野が14例（二十六夜・谷・台川・イギリス海岸・虔十公園林・「ツエ」ねずみ・クンねずみ・さるのこしかけ・やまなし・黒ぶだう・おきなぐさ・とっこべとら子・カイロ団長）に対して、人事分野が6例（車・化物丁場・茨海小学校・革トランク・雪渡り・葡萄水・一九三一年度極東ピチテリアン大会見聞録）となっている。

童話においては、動植物や自然物も擬人化されることが多く、それが作品の主人公あるいは語り手になるのも珍しくない。賢治童話も、そのタイトルを見るかぎりでも、そのことがうかがえる。

6

賢治童話82編における、タイトルとテキストとの関係、具体的には各タイトルの語・表現が当該テキストに出現しているか否かを

見てみる。

まず確認したいのは、タイトルがテキストにまったく見られないのは、次の、わずか4編にすぎないということである。

台川・十月の末・サガレンと八月・朝に就いての童話的構図

「台川」という作品は、全集で11頁分のテキストがあるが、このタイトル語は一度も出てこない。舞台は川なので、「川」およびその関連語は描写の必要に応じて出てくる。あるいはその河川名かもしれない。ただ気になるのは、「おれ」という視点人物が、頻繁にクラスメイトの名字を挙げていて、その中には「五内川・及川・市野川・葛丸川」という「川」を含んだものが目立つ点である。「おれ」の名字ということも考えられなくはない。

「十月の末」と「サガレンと八月」はともに、月名が含まれ、各テキストにおける情景描写からは、その時期であることと矛盾はないものの、当該月に限定されるほどの積極的な結び付きは見出せない。後者のタイトルにある「サガレン」は地名であろうが、テキストが中断したせいなのか、それを示す展開まで及んでいない。

「朝についての童話的構図」は、賢治童話のタイトルとしてはきわめて抽象的で、何を意味するか分かりにくいという点で、異例である。そもそも「童話的構図」という語は、賢治が自身の作品シリーズの1つとして考案したものであって、個々の作品テキスト内に入り込むこと自体が不自然なことなので、テキストに現われないのは当然とも言える。内容は蟻同士のやりとりが中心で、いかにも童話的な世界であるが。「朝」という時間帯についても、テキスト末尾の1文「そのとき霧の向ふから、大きな日がのほり、羊歯もすぎごけもにはかにはつと青くなり、蟻の歩哨は、また厳めしくスナイドル式銃剣を南の方へ構へました。」(12・232)から、どうか察せられる程度である。

7

タイトルの語・表現がテキスト内にも認められる78編について、その初出現がテキストのどこに見られるかを整理してみる。テキストの冒頭部分を、全体の分量に関係なく、全集における各テキストの最初の1頁前後とし、そこにタイトル表現が、その一部であっ

でも現われる作品は55編、全体の7割近くにも及ぶ。

タイトルは普通、テキストに先だつて読まれ、それによつてテキストに対する何らかの予想あるいは予断が読み手に与えられる。そして、タイトルと同じ、あるいは関係する表現がテキストの冒頭部分に出てくれば、さらに読みの方向性が見出しやすくなる。逆に言えば、タイトルあるいはそれに関連しそうな表現がテキストにまったく出てこない、あるいはなかなか出てこないとなると、その分だけ、サスペンス感が高まるものの、作品世界に浸つて読み続けることが難しい。どちらにも、それぞれの魅力はあるが、子供を読者層に設定する童話においては、前者の方が選ばれやすいと考えられる。賢治童話におけるタイトルのテキスト内における出現分布の割合を見ても、そのことが裏付けられよう。

テキストの冒頭部分にタイトル表現がまったく出てこないのは、次の23編である。表現構成ごとに掲げる。

〔名詞〕

二十六夜・カイロ団長・黒ぶだう・やまなし・革トランク

〔名詞+の+名詞〕

十力の金剛石・二人の役人・貝の火・ひかりの素足・黄いろのトマト・マグノリアの木・インドラの網・

ポラーノの広場・風(の)・又三郎・水仙月の四日・氷河鼠の毛皮・イーハトーボ農学校の春・四又の百合

〔名詞+と+名詞〕

氷と後光・シグナルとシグナレス

〔その他の名詞句〕

気のいい火山弾・毒もみの好きな署長さん・注文の多い料理店

表現構成から見ると、最多の〔名詞+の+名詞〕のタイトルが半分以上あり、その構成タイトル全体の3分の1以上を占め、他の構成のタイトルに比べても、比率が高い。これらの、冒頭部分以外での出現位置や出現形式は各々異なつていて、特定の傾向は認められない。

2語以上から成る18タイトルの中で、その一部が冒頭部分以外でも、テキストに出てこないのは、「イーハトーボ農学校の春・四又の百合・毒もみの好きな署長さん」の3編である。これらのタイトル表現の中の、それぞれ「イーハトーボ農学校・四又・好きな」がテキストに用いられていない。

このうち、「毒もみの好きな署長さん」というタイトル表現は、この一続きの形では現われず、「毒もみ」も「署長さん」も最初は別々に出てくる。そして欠けている「好きな」は、当該テキスト末尾の「いよいよ大きな曲った刀で、首を落されるとき、署長さんは笑つ

て云ひました。／「あ、面白かった。おれはもう、毒もみのことときたら、全く夢中なんだ。いよいよこんどは、地獄で毒もみをやるかな。」／みんなすっかり感服しました。」(10・196)の「夢中」に相当し、それがタイトルで「好き」に置き換えられたと見られる(四角囲みおよび改行を示す斜線、また以下の波線は筆者による)。

これらに対して、「イーハトーボ農学校の春」と「四又の百合」という2つのタイトルの場合、鍵となりそうな語のほうがテキストにはまったく出て来ないのはなぜか、問題になりそうである。

前者では、「春」という語は全集7頁分の5頁めに「さあ、**春**だ、うたったり走ったり、とびあがったりするがいい。風野又三郎だって、もうガラスのマントをひらひらさせ大よろこびで髪をばちゃばちゃやりながら野はらを飛んであるきながら**春**が来た、**春**が来たをうたつてゐるよ。」(10・44)と続けて出てくるのに対して、「イーハトーボ農学校」のほうと関連しそうなのは、冒頭部分の「わたしは黄いろの**実習服**を着て、くづれかかった煉瓦の肥溜のそこへあつまりました。」(10・40)や、「さあ、ではみんなどこいつを下台の麦ばたけまで持つて行かう、こっちの崖はあんまり急ですからやっぱり女学校の裏をまはつて楊の木のあるところの坂をおりて行きませう。」(10・42)、「おい、大将、証書はちゃんとしまったかい。筆記帳には組と名前を楷書で書いてしまったの。」(10・44)などが見られるくらいである。

後者では、「百合」という語は全集5頁分の3頁めの会話の中に、「**百合**はもう咲いたか。」／「蕾はみんなできあがりましてございます。秋風の鋭い粉がその頂上の緑いろのかけ金を削つて減してしまひます。今朝一斉にどの花も開くかと思はれます。」／「うん。さうだらう。わしは正偏知に**百合**の花を捧げよう。大蔵大臣。お前は林へ行つて**百合**の花を一茎見附けて来て呉れないか。」(10・100)〜(101)のように出て来て、それ以降も、繰り返されるが、「四又」という、おそらくは茎分れを示す、何か特別な意味を持ちそうな語は最後まで見られない。ただ、「まっ白な貝細工のやうな百合の十の花のついた茎」(10・101)や「立派な百合」(10・102)と形容されるだけで、これらは直接「四又」とは結び付かない。

「イーハトーボ農学校」の方は、「イーハトーボ」が賢治童話では主たる舞台なので、そういう設定を表すタイトルを前提としたうえで、そこでの「春」になった頃のウキウキした様子を描くことが趣旨だったからとも考えられる。一方、「四又」の方はあくまでもタイトルにおける暗示にとどまる。テキストでは、正偏知に百合の花を捧げる場面までは描かれていないからであろう。

残りの20タイトルは、語数に関係なく、それぞれのテキストの冒頭部分より以降に、まるごと現われる。

その中で、タイトルがテキストを分ける章のタイトルにもなっているのが2編ある。「ひかりの素足」と「ポラーノの広場」である。作品のタイトルと章のタイトルが同じということは、当該章のタイトルがテキスト全体のタイトルにもなったということであり、その章が作品の中心となつてゐることを示すと言えよう。

「ひかりの素足」という作品では、4章に分けられたテキストの最後の章に「四、光のすあし。」というタイトルが付けられ、その後、「その人の足は白く光って見えました。実際にはやく実にまっすぐにこつちへ歩いて来るのでした。まっ白な足さきが二度ばかり光りもうその人は一郎の近くへ来てゐました。／＼一郎はまぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。その人ははだしでした。まるで貝殻のやうに白くひかる大きなすあしでした。くびすのところの肉はかゝやいて地面まで垂れてゐました。大きなまっ白なすあしだったので。」(8・299～300)という本文が続く。

「ポラーノの広場」という作品では、前書きのあと6つに分けられたうちの3番めの章のタイトルが「三、ポラーノの広場」となつてゐる。ただし、「ポラーノの広場」という表現自体は、「一、通げた羊」において、「何を探すつていふの？」子どもはしばらくちゅうちよしてゐましたがたうたう思ひ切つたらしく云ひました。「ポラーノの広場?」「ポラーノの広場? はてな、聞いたことがあるやうだなあ。何だつたらうねえ、ポラーノの広場。」(11・73)のように、すでに現われている。また、当該タイトルの第三章には、「つめくさの花の 咲く晩に／ポランの広場の 夏まつり／ポランの広場の 夏まつり／酒を吞まずに 水を吞む／そんなやつらが かけて来ると／ポランの広場も 朝になる／ポランの広場も 白っぽくれる」(11・90～91)のように、歌の中では、改稿前のタイトル形である「ポランの広場」が修正されないまま用いられている。

これらに準じる作品として「二十六夜」がある。テキストの章立てはされていないが、冒頭文の「旧暦の六月二十四日の晩でした。」に始まり、「※／その次の日の六月二十五日の晩でした。」「※／旧暦六月二十六日の晩でした。」と続き、最後「たゞその澄み切つた桔

梗いろの空にさっきの黄金いろの二十六夜のお月さまが、しづかにかかってゐるばかりでした。／「おや、穂吉さん 息つかなくなつたよ。」俄に穂吉の兄弟が高く叫びました。／ほんたうに穂吉はもう冷たくなって少し口をあき、かすかにわらつたまゝ、息がなくなつてゐました。そして汽車の音がまた聞えて来ました。」(9・172)で終わる。つまり、各エピソードの日付を示す冒頭表現が章タイトルの代わりをなしているのである。

9

上記以外の17編の作品におけるタイトルとテキストの関係で気付かれるのは、テキストを地の文とそれ以外に分けると、地の文にタイトル表現が出てくるのが7編、それ以外が10編で、地の文以外の、会話文・引用文などの方にやや多く見られるということである。

テキストの地の文における、しかも冒頭部分以降に現われるタイトル表現は、タイトルにされるだけの価値はあるものの、作品中の素材の1つとして示されるにすぎない。

たとえば、「二人の役人」では、テキストの中ほどに「向ふから二人の役人が大急ぎで路をやって来るのです。それも何だかみちから外れて私どもの林にやって来るらしいのです。」(9・113)とあり、視点はあくまでも「私ども」の方にある。同じくテキストの中ほどの地の文にタイトル表現が出てくる「皮トランク」では、「平太はいろいろ考へた〔末〕二十円の大きな革のトランクを買ひました。けれどももちろん平太には一張羅の着てゐる麻服があるばかり他にに入れるやうなものは何もありませんでしたから親方に頼んで板の上に引いた要らない絵図を三十枚ばかり貰つてぎつしりそれに詰めました。」(9・176)、「黄いろのトマト」では、「ところが一五本のチェリーの中で、一本だけは奇体に黄いろなんだらう。そして大へん光るのだ。ギザギザの青黒い葉の間から、まばゆいくらゐる黄いろなトマト」がのぞいてゐるのは立派だった。だからネリが云つた。／「にいさま、あのトマトどうしてあんなに光るんでせうね。」／「ベルベルは唇に指をあててしばらく考へてから答へてゐた。／「黄金だよ。黄金だからあんなに光るんだ。」／「まあ、あれ黄金なの。」／「ネリがすこしびつくりしたやうに云つた。／「立派だねえ。」／「え、立派だわ。」／そして二人はもちろん、その黄いろなトマトをと

りもしなければ、一寸さわりもしなかった。」(9・190～191)、「マクノリアの木」では、「諒安は眼を疑ひました。そのいちめんの山谷の刻みにいちめんまっ白にマクノリアの花が咲いてゐるのでした。その日のあたるところは銀と見え陰になるところは雪のきれと思はれたのです。」(9・270)のように、それぞれタイトルに表された事物がテキストにおいて象徴的あるいは神秘的な役割を果たしていると言える。

テキストの末尾部分の地の文にタイトル表現が見られるのが、「黒ぶだう」と「気のいい火山弾」の2編。「黒ぶだう」では、「てかてかした円卓の上に乗っ白な皿があつてその上に立派な二房の黒ぶだうが置いてありました。冷たさうな影法師までちゃんと添へてあつたのです。／「さあ、喰べやう。」狐はそれを取つてちよつと嗅いで検査するやうにしなごら云ひました。」(10・85)のように、唐突に現われ、「気のいい火山弾」では、研究者に発見された「ペゴ石」が「火山弾」と呼ばれ、持ち運ばれようとする場面で、「稜のある石は、だまつてため息ばかりついてゐます。そして気のいい、火山弾は、だまつてわらつて居りました。」(8・121)のように、ここにおいてのみ擬人化されて出てくる。

唯一、比較的冒頭に近い地の文に現われ、主人公的な位置を占めるのが、「シグナルとシグナレス」で、「そこで軽便鉄道附きの電信柱どもは、やつと安心したやうに、ぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木をあげました。このまつすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。」(12・142)、『お早う今朝は暖ですな。』本線のシグナル柱はキチンと兵隊のやうに立ちながらいやにまじめくさつて挨拶しました。／『お早うございます』シグナレスはふし目になつて声を落して答へました。」(12・143)のやうに出てくる。ただ、実物指示と擬人表現が入り混じつて現われ、混乱しなくもない。

10

冒頭部分以降に、地の文以外で、タイトル表現が出て来る作品は10編あるが、その中で他と異なるのは、「十力の金剛石」と「注文の多い料理店」の2編である。

「十力の金剛石」では、そのタイトル表現がテキスト終盤で、次のように歌う中に出てくる。「この時光の丘はサラサラサラッと一め

んけはひがして草も花もみんなからだをゆすつたりかゝめたりきらきら宝石の露をはらひギンザン、リン、ギンと起きあがりました。そして声をそろへて空高く叫びました。『十力の金剛石はけふも来ず／＼めぐみの宝石はけふも降らず、／＼十力の宝石の落ちざれば、／＼光の丘も まつくろのよる。』(8・198)。「注文多い料理店」では、テキストの中ほどの、貼り紙の文句の中に、そのまま出てくる。「そして二人はその扉をあけやうとしますと、上に黄いろな字でかう書いてありました。／＼「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」(12・300～311)。そして、その後にも順に、「注文はずるぶん多いでせうがどうか一々こらえて下さい。』(12・311)、「いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう。お気の毒でした。』(12・34) のように続き、これらの「注文」が客からではなく店からであることが徐々に明らかになっていく。

残りの8編は、タイトル表現が会話文の中に現われ、それによって、それ以前には不明だったものの正体が明らかにされる展開になっている。

たとえば、「風」の「又三郎」では、転校生の正体について、「そのとき風がどうと吹いて来て教室のなかのことも何だかにやっとわらってすこしうごいたやうでした。すると嘉助がすぐ叫びました。「あ、わかった あいつは風の又三郎だぞ。』(11・174)、「貝の火」では、子兎のホモイに対して、ひばりの母親の言う、「これは貝の火といふ宝珠でございます。王さまのお言伝ではあなた様のお手入れ次第で、この珠はどんなにでも立派になると申します。どうかお納めをねがひます。』(8・41)、「水仙月の四日」では、雪童子の「ひゆう、ひゆう、なまけちや承知しないよ。降らすんだよ。降らすんだよ。さあ、ひゆう。今日は水仙月の四日だよ。ひゆう、ひゆう、ひゆう、ひゆう。』／＼そんなはげしい風や雪の声の間からすきとほるやうな泣声がちらつとまた「聞」えてきました。』(12・50)、「氷河鼠の毛皮」では、銀河鉄道の乗客同士の会話の中での、「それから氷河鼠の頸のこの毛皮だけ」(で)「こさへた上着ね。』／＼『大丈夫です。しかし氷河鼠の頸のこの毛皮はせい沢ですな。』(12・134)、「やまなし」では、「黒い円い大きなものが、天井か□ら落ちてずうつとしづんで又上へのぼつて行きました。キラキラツと黄金のぶちがひかりました。』／＼『かはせみだ』子供らの蟹は頸をすくめて云ひました。』／＼『さうぢやない、あれはやまなしだ、流れて行くぞ、ついて行つて見やう、あ、い、句ひだな』(12・129)という、蟹の子供らに対する父親の言葉、「インドラの網」では、「天の子供らは夢中になつてはねあがりまっ青な静寂印の湖の岸佳砂の上をかけまはりました。そしていきなり私にぶつつかりびっくりして飛びのきながら一人が空を指して叫び

ました。／「ごらん、そら、インドラの網を。」／私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変わったその天頂から四方の青白い天末までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その織維は蜘蛛のより細く、その組織は菌糸より緻密に、透明清澄で又青く幾億互に交錯し光って顛えて燃えました。」(9・277)の中の天の子供らの言葉、「氷と俊光」では、末尾部分での若いお母さんの言葉、「さあ、又お座りね。」こともは又窓の前の玉座に置かれました。小さな金平糖のやうな美しい赤と青のぶちの苹果を、お父さんはこどもに持たせました。／「あら、この子の頭のとこで氷が俊光のやうになってますわ。」若いお母さんはそっと云ひました。」(10・97)、という具合に、それぞれの場面での登場人物の誰かによる発見あるいは説明として、タイトル表現が認められる。

さらに、「カイロ団長」では、「そこでとのさまがへるは、うしろの戸をあけて、前の二人を引っぱり出しました。そして一同へおごそかに云ひました。／「い、か。この団体はカイロ団といふことにしやう。わしはカイロ団長ぢや。あしたからはみんな、おれの命令にしたがふんだぞ。い、か。」(8・227)のように、タイトルの名称が自らの命名であることが示されるケースもある。

これらのタイトル表現は、テキストの地の文に出現するのに比べれば、各作品のストーリー展開を大きく左右する働きをしていると言える。

11

タイトル表現がテキストの冒頭部分に出現する、賢治童話における両者の関係のしかたの中心を占める作品55編を、その出現具合によって分類すると、以下のように7タイプに分けられる。

- A…タイトル表現が冒頭章のタイトルとしても出現するタイプ…3編(雪渡り・双子の星・北守將軍と三人兄弟の医者)
- B…タイトル表現がそのまま冒頭部分に出現し、かつその命名が取り上げられるタイプ…6編(「ツエ」ねずみ・クンねずみ・とつこべとら子・イギリス海岸・おきなくさ・狼森と笹森、盗森)
- C…タイトル表現が冒頭部分にほぼそのまま出現するタイプ…12編(ざしき童子のはなし・さるのこしかけ・いてふの実・なめとこ山の熊・鳥をとるやなぎ・畑のへり・雁の童子・化物丁場・車・谷・茨海小学校・紫紺染について)

D…タイトル表現そのままの形ではないが、要素のほぼすべてが冒頭部分に出現するタイプ…10編（土神ときつね・ひのきとひなげし・マリヴロンと少女・オツベルと象・月夜のけだもの・月夜のでんしんばしら・セロ弾きのゴーシュ・耕耘部の時計・学者アラムハラドの見た着物・一九三二年度極東ビヂテリアン大会見聞録）

E…タイトル表現の一部が冒頭部分に出現し、その全体が後に出てくるタイプ…6編（よだかの星・チュウリップの幻術・虔十公園林・葡萄酒・鳥の北斗七星・かしはばやしの夜）

F…タイトル表現の一部が冒頭部分に出現し、残りが後の部分に現われるタイプ…9編（どんぐりと山猫・鳥箱先生とフウねずみ・まなづるとダアリア・銀河鉄道の夜・馬の頭巾・蛙のゴム靴・ガドルフの百合・樺ノ木大学士の野宿・タネリはたしかにいちにち噛んでゐたやうだった）

G…テキスト表現の一部は冒頭部分に出現するが、残りはテキストに現われないタイプ…9編（寓話 猫の事務所・寓話 洞熊学校を卒業した三人・グスコープドリの伝記・鹿踊りのはじまり・バキチの仕事・山男の四月・林の底・みぢかい木ペン・よく利く薬とえらい薬）

このうち、Aタイプがタイトルとテキストの関係がもつとも強く、それ以降は次第に直接的な関係が薄れてゆくが、どれかのタイプに集中するのではなく、A以外は、すべてのタイプにほぼ万遍なく分散している。

以下、順にタイプごとに、その出現のしかたの具体的な状況を見てみる。

12

まずは、Aタイプから。

「雪渡り」は、「雪渡り（子狐の紺三郎）（二）」と「雪渡り その二（狐小学校の幻燈会）」の2章から成り、テキスト全体のタイトルがそれぞれの章のタイトルにもなっている。ただし、テキストそのものに「雪渡り」という語はなく、「雪渡り（子狐の紺三郎）（二）」の章の終りに、「そこで四郎とかん子とは／「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」と歌ひながら銀の雪を渡つておうちへ帰りました。」

(12・118)とあり、これを名詞化してタイトルにしたと見られる。

「双子の星」も、「双子の星。一」、「双子の星。二」というタイトルが付けられた2章から成っている。「雪渡り」と異なるのは、テクスト自体にも、その冒頭文から「天の川の西の岸にすぎなな胞子ほどの小さな二つの星が見えます」(8・19)とあり、冒頭第五文にも「それがこの双子のお星様の役目でした。」(8・19)とあって、それ以降も末尾まで繰り返し出てくる。

「北守將軍と三人兄弟の医者」は、「一、三人兄弟の医者」「二、北守將軍ソニー」「三、リンパー先生」「四、馬医リン」「五、リンパー先生」「六、北守將軍仙人となる」の5章から成り、各章での中心人物を表す表現がタイトルになっている。この第一章で、まずその兄弟の紹介があり、第二章で、件んの將軍が登場し、第三章から第五章で、両者の関わりが描かれ、第六章で、將軍の最期とその後が記される。

これらAタイプの3編は、そのタイトルが各章のタイトルになっていることから明らかなように、タイトルが作品の内容の中心であることを示す働きをしている。

次のBタイプは、タイトルと、テクストにおけるその出現の関係としては、実質的にCタイプと同じであるが、その重みが異なるという点で、区別される。すなわち、Bタイプは以下に示すように、テクスト冒頭部分で、タイトルが物の名前であることやその命名の由来に関する説明がわざわざ取り立てられ、それを契機あるいは中心としてテクストが展開するのであるから、タイトルの重要性は言うまでもない。

・ある古い家の、まっくらな天井うらに、「ツエ」という名まへのねずみがすんでゐました。(「ツエ」ねずみ) 8・162)

・クンねずみのうちは見はらしのいいところがありました。(中略) 全体ねずみにはいろいろくしゃくしゃな名前があるのですからいちいちそれをおぼえたらとてももう大へんです。一生ねずみの名前だけのことで頭が一杯になってしまひますからみなさんどうか クン といふ名前のほかはどんなのが出て来てもおぼえないで下さい。(「クンねずみ」 8・175)

・おとら狐のはなしは、どなたもよくご存じでせう。おとら狐にも、いろいろあったのでせうか、私の知ってゐるのは、「とっこべ」とら子」といふのです。／「とっこべ」といふのは名字でせうか。「とら」といふのは名前ですかね。さうすると、名字がさまざままで、名前がみんな「とら」と云ふ狐が、あちこちに住んで居たのでせうか。(「とっこべとら子」 8・260)

・夏休みの十五日の農場実習の間に、私どもがイギリス海岸とあだ名をつけて、二日か三日ごと、仕事が一きりつくたびに、よく遊びに行った処がありました。／それは本たうは海岸ではなくて、いかにも海岸の風をした川の岸です。北上川の西岸でした。(「イギリス海岸」10・47)

・うずのしゅげを知つてゐますか。／うずのしゅげは、植物学ではおきなくさと呼ばれますがおきなくさといふ名は何だかあのやさしい若い花をあらはさないやうにおもひます。／そんならうずのしゅげとは何のことかと云はれても私にはわかつたやうな亦わかわらないやうな気がします。(「おきなくさ」9・179)

・小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森^{オイノモリ}、その次が笹森、次が黒坂森、北のはづれは盗森^{ぬすもり}です。／この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巖が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。(「狼森と笹森、盗森」12・19)。

13

CとDという2つのタイプは、タイトル表現を構成する要素がテキスト冒頭部分に出揃うという点では、共通している。異なるのは、タイトル表現そのままか、その要素に分かれて出ているかである。これらは、タイトルがそのテキスト全体のテーマあるいはメインのモチーフを表すものであることを、あらかじめ示している。

Cタイプの典型が「ざしき童子のはなし」で、テキスト冒頭はタイトルそのまま「ぼくらの方の、ざしき童子のはなしです。」(12・170)で始まる。

これに次いで話題性が顕著なのは、「なめとこ山の熊」の「なめとこ山の熊のことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。」(10・264)、「紫紺染について」の「盛岡の産物のなかに、紫紺染といふものがあります。／これは、紫紺といふ桔梗によく似た草の根を、灰で煮出して染めるのです。」(10・184)である。

また、会話の話題としてタイトルが取り上げられるのが、「化物丁場」の「ははあ、あの化物丁場」だ。私は思ひながら、急いでそつちを振り向きました。その人は線路工夫の絆纏を着て、鏝の広い麦藁帽を、上の棚に載せながら、誰に云ふとなく大きな声でさう言つてゐたのです。／「あ、あの化物丁場ですか、壊れたのは。」私は頭を半分そつちへ向けて、笑ひながら尋ねました。」(9・126)、「雁の童子」の「失礼ですがあのお堂はどなたをおまつりしたのですか。」／その老人も、たしかに何か、私に話しかけてたくてゐたのです。だまつて二三度うなづきながら、そのたべものをのみ下して、低く言ひました。／「……童子のです。」／「童子ってどう云ふ方ですか。」／「雁の童子と仰っしゃるのには、老人は食器をしまひ、屈んで泉の水をすくひ、きれいに口をそいでから又云ひました。／「雁の童子と仰っしゃるのには、まるでこの頃あつた昔ばなしのやうなのです。」(この地方にこのごろ降りられました天童子だといふのです。このお堂はこのごろ流沙の向ふ側にも、あちこち建つて居ります。)(9・279～280)、「鳥をとるやなぎ」の「煙山にエレッキのやなぎの木があるよ。」／藤原慶次郎がだしぬけに私に云ひました。私たちがみんな教室に入つて、机に座り、先生はただ教員室に寄つてゐる間でした。(中略)／「さっきの楊の木ね、煙山の楊の木ね、どうしたつて云ふの。」／慶次郎はいつものやうに、白い歯を出して笑ひながら答へました。／「今朝権兵衛茶屋のところで、馬をひいた人がさう云つてゐたよ。煙山の野原に鳥を吸い込む楊の木があるつて。エレキらしいつて云つたよ。」(9・119～120)であり、さらに独り言ではあるが、「さるのこしかけ」の「ははあ、これがさるのこしかけだ。けれどもこいつへ腰をかけるやうなやつなら、ずるぶん小さな猿だ。そして、まん中にかけるのがきつと小猿の大將で、両わきにかけるのは、たゞの兵隊にちがひない。いくら小猿の大將が威張つたつて、僕のにぎりこぶしの位もないのだ。どんな顔をしてゐるか、一ぺん見てやりたいもんだ。」／そしたら、きのこの上に、ひよつこり三疋の小猿があらはれて腰掛けました。」(8・90)である。この最後の「さるのこしかけ」の場合、比喩に由来して一語化している植物名を、文字通りの物の名称としたうえで、童話化している点に特色がある。

Cタイプの残り5編は、タイトルが以下のごとく、冒頭部分の地の文に出て来る。「麻が刈られましたので、畑のへりに一列に植えられてゐたうもろこしは、大へん立派に目立ってきました。」(畑のへり)10・288)、「櫛渡のとこの崖はまっ赤でした。／それにひどく深く急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのです。」(谷底には水もなんにもなくて、青い梢と白樺などの幹が短く見えるだけでした。)(「谷」九・104)、「赤髯の男はぐいぐいハーシユの手を引っぱつて一台のよぼよぼの車」とこまで連

れて行きました。」〔「車」10・87〕、「いてふの実はみんな一度に目をさしました。そしてドキッとしたのです。今日こそはたしかに旅立ちの日でした。」〔いてふの実 8・67〕、「私が茨海の野原に行ったのは、火山弾の手頃な標本を採るためと、それから、あすこに野生の浜茄が生えてあるといふ噂を、確めるためとでした。(中略)／火山弾の方は、はじが少し潰れてはるましたが、半日かかってとにかく一つ見附けました。／見附けたのですが、それはつい寄附させられてしまひました。誰に寄附させられたのかっていふんですか。誰にって校長ですよ。どこの学校？ え、どこの学校って正直に云っちゃまひますとね、茨海狐小学校です。愕いてはいけません。実は茨海狐小学校をそのひるすぎすっかり参観して来たのです。」〔茨海小学校 9・134〕

上記のうち、「畑のへり」「谷」「車」の三編は、タイトル自体も一般的な語としてのイメージしか喚起しないが、テキストの冒頭部分の地の文においても、とくに目立つた取り上げられ方をしていない。むしろ、タイトルとされていることによって、それらにその後のテキストにおいて何らかの展開があることが予想される形になっている。

これらに対して、「いてふの実」は、冒頭部分の擬人化によって、それがテキストで中心的な役割を果たすことがうかがえる。「茨海小学校」の場合、そのタイトルだけからでは、普通に人間の通う、地域の小学校であることが想定されるが、冒頭部分に示されるのは「狐」が挿入された形である。「愕いてはいけません。」という断りは、参観したことに対してではなく、狐の小学校であることに對してであり、あえてタイトルに「狐」を入れなかったのは、その意外性をテキストまで持ち込むためであったと推測される。

Dタイプについて、タイトルの表現構成ごとに見てみる。

1語から成る「一九三二年度極東ビヂテリアン大会見聞録」は、次のようにテキスト冒頭に現われる。

・ 去る九月四日、花巻温泉で第十七回極東ビヂテリアン大会が行はれた。これは世界の食糧問題に対する相当の陰謀をも含むもので昔は極めて秘密に開催されたものであるさうであるが今年に公開こそはしなかったが別にかくしもしなかったやうだ。／たぶんそれは世界革命の陰謀などにくらべると余りこどもじみたものなので誰もびびくりしないためであつたらうと思はれる。／その代りその会合たるや極めて古典的で当時温泉に浴してこれを見聞した筆者の無為を慰すること甚大であつた。(一九三二年度極東ビヂテリアン大会見聞録) 10・338)

「一九三二年度」と「録」はテキストに出てこないが、それが内容の中心であることは冒頭文ではほぼ尽きている。この作品の改稿前

のタイトルは「ビヂテリアン大祭」であり、まさにその中心のみを表すものだったのであるが、それに「一九三一年度・極東・見聞・録」などを付加したのは、その年度・地域に特有であったことと、会員ではない第三者が見聞きした記録であることを明示したほうが良いと判断したことによると思われる。

「名詞十の十名詞」のタイトルは、「ゴージュ」は町の活動写真館で「セロ」を「弾」く係りでした。「セロ弾きのゴージュ」11・219)、「十日の月」が西の煉瓦塀にかくれるまで、もう一時間しかありませんでした。／その青じろい月の明りを浴びて、獅子は檻のなかをそのそあるいて居りましたがほかの「けだもの」どもは、頭をまげて前あしにのせたり、□横にごろっとねころんだりしづかに睡っておきました。夜中まで檻の中をうろうろしてゐた狐さへ、おかしな顔をしてねむってゐるやうでした。「月夜のけだもの」10・292)、「九日の月」がそらにかゝってゐました。そしてうろこ雲が空いつばいでした。うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの底までもしみとほつてよろよろするといふふうでした。(中略)、さつきから線路の左がはで、ぐわあん、ぐわあんとうなつてゐた「でんしんばしら」の列が大威張りで一ぺんに北のはうに歩きだしました。「月夜のでんしんばしら」12・79〜80)、「農場の耕耘部の農夫室は、雪からの反射で白びかりがいっぱいでした。(中略)／みんなはそれっきり黙って仕度しました。赤シャツはみんなの支度する間、入口にまっすぐ立って、室の中を見まはしてゐましたが、ふと室の正面にかけてある円い柱時計を見あげました。／その盤面は青じろくて、ツルツル光って、いかにも舶来の上等らしく、どこでも見たことのないやうなものでした。」(「耕耘部の時計」10・60〜61)のように、テキストに現われる。

このうち、「月夜のけだもの」と「月夜のでんしんばしら」では、「夜」がテキストに見られないが、それは文脈的に自明のことであり、「けだもの・でんしんばしら」を修飾するのに「月夜」とする方が表現として落ち着くからであろう。

「名詞十と十名詞」のタイトルは、「ひなげし」はみんなまっ赤に燃えあがり、めいめい風にぐらぐらゆれて、息もつけないやうでした。そのひなげしのうしろの方で、やっぱり風に髪もからだも、いちめんもまれて立ちながら若い「ひのき」が云ひました。「ひのきとひなげし」11・212)、「この木に二人の友達がありました。一人は丁度五百歩ばかり離れたぐちゃぐちゃの谷地の中に住んでゐる「土神」で一人はいつも野原の南の方からやって来る茶いろの「狐」だったので。」(「土神ときつね」9・246)、「ひとりの少女が楽譜をもつてためいきしながら藪のそばの草にすはる。(中略)／かすかなけはひが藪のかげからのぼってくる。今夜市庁のホールでうた

ふマリブロン女史がライラックいろのもすそをひいてみんなをのがれて来たのである。」「(「マリヴロンと少女」10・300)、「オツベルときたら大したもんだ。(中略)／そしたらそこへどういふわけか、その、白象がやつて来た。白い象だけ、ペンキを塗つたのでないぜ。どういふわけで来たかつて? そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだらう。」「(「オツベルと象」12・161～162)のように、タイトルそのままではなく、現われる。

テキストにおいて、それぞれの対象の説明をするには、順番に挙げざるをえないのであるが、タイトルにするにあたって、簡潔に並列表現にしたとみなされる。

なお、「マリヴロンと少女」は、全集によれば「同一草稿上で大幅に手入れ改作したもの」として「めくらぶだうと虹」と関係付けられているが、テキストそのものはまったく異なると言ってもよいほどであり、タイトルの違いはそれぞれに即したものである。

「その他の名詞句」としては「学者アラムハラドの見た着物」が相当し、「学者のアラムハラド」はある年十一人の子を教へて居りました。(中略)／このおはなしは結局学者のアラムハラドがある日自分の塾でまたある日山の雨の中でちらつと感^じじた不思議な^着物^についてであります。」「(学者アラムハラドの見た着物」9・330～331)のように出てくる。テキストでは、「見た」が「感じた」になっていて、タイトルの方が、分かりやすく視覚に特定されている。

14

EとFの2タイプは、タイトル表現の一部が冒頭部分に現われる点で共通し、その後にタイトルの全体が出てくるか、残りの部分だけが出てくるかという点で相異なる。

Eタイプの中でとくに印象的なのは、テキストの末尾部分にタイトル表現全体が現われる作品で、冒頭部分での一部はその布石の役割を果たし、タイトルに収斂する形でテキストが終わる。これに相当するのが、「よだかの星」における冒頭文の「よだかは、実にみにくい鳥です。」「(8・83)と末尾の「そしてよだかの星は燃えつきました。／今でもまだ燃えてゐます。」「(8・89)、「度十公園林」における冒頭文の「度十はいつも縄の帯をしめてわらって杜の中や畑の間をゆっくりあるいてゐるのです。」「(10・103)

とほぼ末尾の「(略)こ、はもういつまでも子供たちの美しい公園地です。どうでせう。こ、に虔十公園林と名をつけていつまでもこの通り保存するやうにしては。」／「これは全くお考へつきです。さうなれば子供らもどんなにしあはせか知れませんか。」／さてみんなその通りになりました。／芝生のまん中、子供らの林の前に／「虔十公園林」と彫った青い橄欖岩の碑が建ちました。」(10・109)、「チュウリップの幻術」における冒頭頁の「洋傘直しは農園の中へ入ります。しめった五月の黒つちにチュウリップは無雑作に並べて植えられ、一めん咲き、かすかにかすかにゆらいでゐます。」(9・198)と末尾頁の「あ、もうよほど経つたでせう。チュウリップの幻術」にかかつてゐるうちに。もう私は行かなければなりません。さようなら。」／「さうですか。ではさようなら。」／洋傘直しは荷物へよろよろ歩いて行き、有平糖の広告つきのその荷物を肩にし、もう一度あのあやしい花をちらつと見てそれからすももの垣根の入口にまっすぐに歩いて行きます。」(9・207)である。

Eタイプの残り3編は、タイトル表現の全体がテクストの中ほどに現われるもので、「葡萄水」では「耕平は髪も角刈りで、をとなのくせに、今日は朝から口笛など吹いてゐます。／畑の方の手があいて、こ、二三日は、西の野原へ、葡萄をとりに出られるやうになつたからです。」(9・388)と冒頭にあつて、後に「特製御葡萄水」といふ、去年のはり紙のあるものもあります。このはり紙はこの辺で共同でこしらへたのです。これをはつて売るので。」(9・392)とあり、「烏の北斗七星」では「つめたいいちの悪い雲が、地べたすれすれに垂れましたので、野はらは雪のあかりだか、日のあかりだか判らないやうになりました。／烏の義勇艦隊は、その雲に圧しつけられて、しかたなくちよつとの間、垂鉛の板をひろげたやうな雪の田圃のうへに横にならんで仮泊といふことになりました。」(12・38)という冒頭から、中ほどで「烏の大尉とたゞ二人、ばたばた羽をならし、たびたび顔を見合せながら、青黒い夜の空を、どこまでもどこまでもほつて行きました。もうマヂエル様と呼ぶ烏の北斗星が、大きく近くなつて、その一つの星のなかに生えてゐる青じろい苹果の木さへ、ありありと見えるころ、どうしたわけか二人とも、急にはねが石のやうにこわばつて、まつさかさまに落ちかゝりました。」(12・42)と出て来て、「かしはばやしの夜」では「いきなり、向ふの栢ばやしの方から、まるで調子づれの途方もない変な声で、／「鬱金しやつほのカンカラカンのカアン。」とどなるのがきこえました。」(12・64)と冒頭すぐにあります、やがて「栢の木大王も白いひげをひねつて、しばらくうむうむと云ひながら、ちつとお月さまを眺めてから、しづかに歌ひだしました。／「こよひあなたは　ときいろの／むかしのきもの　つけなざる／かしはばやしの　このよひは／なつのをどりの　だいさ

んや(略)」「(12・68)のように挿入歌の中に現われる。

タイトル表現の一部が冒頭部分に出現し、残りが後の部分に現われるFタイプは、ストーリーの展開にしたがつて、新たな要素が登場してゆくパターンである。

そのうち、「馬の頭巾」と「タネリはたしかにいちにち噛んでゐたようだった」の2編では、タイトルのうち、「馬」と「タネリ」が冒頭部分に出現し、残りの部分がテキスト末尾近くに現われる。前者は冒頭が「甲太は、まちはづれに、おかみさんと二人すんでゐました。そして、一疋の黒い馬」と、一台の荷馬車とを、有つてをりました。馬は二歳こで、実に立派なものでした。むねやしりなどは、てかてか黒光りでした。が惜しいことには、少しびっこを引くのでした。」(8・139)、末尾近くが「(略)この頭巾はお前んとこでこさえたのか。うまい。仲々うまい。(略)」「(8・143)、後者は既に示したが、冒頭が「ホロイタネリは、小屋の出口で、でまかせのうたをうたひながら、何か細かくむしつたものを、ばたばたばた、棒で叩いて居りました。」(10・75)、末尾近くが「うん。けれどもおいら、一日噛んでゐたやうだったよ。」(10・82)である。

他はタイトルの残り部分がテキストの中ほどに出て来るケースで、冒頭部分から比較的連続して登場するのは、「蛙のゴム靴」における、冒頭の「松の木や榎の木の林の下を、深い堰が流れて居りました。岸には茨やつゆ草やたでが一杯にしげり、そのつゆくさの十本ばかり集つた下のあたりに、カン蛙のうちがありました。／それから、林の中の榎の木の下に、ブン蛙のうちがありました。／林の向ふのすゝきのかげには、ベン蛙のうちがありました。／三疋は年も同じなら大きさも大い同じ、どれも負けず劣らず生意気で、いたづらものでした。」(10・304)の「蛙」と、次に続く「さうか。そんなら一つお前さん、ゴム靴を一足工夫して呉れないか。形はどうでもいいんだよ。僕がこしらえ直すから。」(10・306)の「ゴム靴」、「まなづるとダアリア」における、冒頭の「くだもの畑の丘のいただきに、ひまはりぐらゐせいの高い、黄色なダアリアの花が二本と、まだたけ高く赤い大きな花をつけた一本のダアリアの花がありました。／この赤いダアリアは花の女王にならうと思つてゐました。」(10・317)の「ダアリア」と、続けての「ピートリリ、ピートリリ。」と鳴いて、その星あかりの下を、まなづるの黒い影がけて行きました。／「まなづるさん。あたしずるぶんきれいでせう。」赤いダアリアが云ひました。／「あゝきれいだよ。赤くつてねえ。」／鳥は向ふの沼の方のくらやみに消えながらそこにつゝましく白く咲いてゐた一本の白いダアリアに声ひくく叫びました。「今ばんは。」白いダアリアはつゝましくわらつてゐました。」

(10・318)の「まなづる」、「櫛ノ木大学士の野宿」における、「櫛ノ木大学士」は宝石学の専門だ。(9・345)の「櫛ノ木大学士」と、追って歌の中の「(略)出掛けた為にたうたう櫛ノ木大学士の、野宿といふことも起こったのだ。／三晩といふもの起ったのだ。」(9・347)の「野宿」である。

やや離れているのは、「どんぐりと山猫」における、冒頭の「おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。／かねた一郎さま 九月十九日／あなたは、ごきげんよろしいほど、けつこです。／あした、めんどなさいばんしますから、おいで／んなさい。とびどくもたないでくさい。／山ねこ 拜(12・9)の「山ねこ」と、中ほどの「そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるやうな、音をき、ました。びつくりして屈んで見ますと、草のなかに、あつちにもこつちにも、黄金いろの円いものが、びかぴかひかひかつてゐるのです。よくみると、みんなそれは赤いぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないやうでした。わあわあわあわ、みんななにか云つてゐるのです。」(12・13～14)の「どんぐり」、「鳥箱先生とフウねずみ」における、冒頭の「あるうちに鳥かごがありました。／鳥かごと云ふよりは、鳥箱といふ方が、よくわかるかもしれません。と、そこに入れてたひよどりに、鳥箱が語りかける、「おれは先生なんだぞ。鳥箱先生といふんぞ。お前を教育するんだぞ。」(8・169)の「鳥箱先生」と、中ほどの「親ねずみは、あんまりうれしくて、声も出ませんでした。そして、ペコペコ頭をさげて、急いで自分の穴へもぐり込んで、子供のフウねずみを連れ出して、鳥箱先生の処へやって参りました。」(8・171)の「フウねずみ」、「ガドルフの百合」における、冒頭の「ハックニー馬のしっぽのやうな、巫戯けた楊の並木と陶製の白い空の下を、みじめな旅のガドルフは、力いっぱい、朝からつゞけて歩いて居りました。」(9・338)の「ガドルフ」と、中ほどの「向ふのほんやり白いものは、かすかにうごいて返事もませんでした。却って注文通りの電光が、そこら一面ひる間のやうにして呉れたのです。／「ははは、百合の花だ。なるほど、ご返事のないのも尤もだ。」(9・341)の「百合」、そして「銀河鉄道の夜」における、「一、午後の授業」という冒頭章の「ではみなさんは、さういふふう川だと云はれたり、乳の流れたあとだと云はれたりしてゐたこのほんやりとした白いものがほんたうは何かご承知ですか。」先生は、黒板に吊した大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のやうなところを指しながら、みんなに問をかけました。」(11・123)の「銀河」と、テクスト後半の「(六)銀河ステーション」の章の「気がついてみると、さつきから、ことごとことごとこと、ジヨバンニの乗つてゐる小さな列車が走りつづけてゐたのです。ほんたうにジヨバンニ

は、夜の軽便鉄道の、小さな黄いろの電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。」(11・135)の「夜・鉄道」である。

15

最後のGタイプは、テキストの冒頭部分にタイトルの一部が現われるものの、残りはテキストに現われない作品である。なぜ現われないのか、その理由によって分けると、3種類になる。

第一は、テキストの性格を示すメタ・レベルの語が含まれている場合である。「寓話 猫の事務所」「寓話 洞熊学校を卒業した三人」「グスコープドリの伝記」の3作品における「寓話」「伝記」がそれに相当し、それらはテキストに出て来ない。

「寓話」を冠する2編は、既に指摘したように、改稿後にタイトルに付加されたものであり、他の賢治童話の多くと同様、ともに動物を擬人化した主人公とする作品であるから、寓話であることは自明であるものの、そのことをあえてタイトルに示すことによって、事前に他の解釈を防ごうとしたのかもしれない。とりわけ「寓話 洞熊学校を卒業した三人」の方は、原題が「蜘蛛となめくじと狸」であったので、「洞熊学校を卒業した三人」と変更しただけでは、動物寓話とは受け取られない恐れがあったろう。

3編の各冒頭部分には、「軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。」(「寓話 猫の事務所」12・173)、「赤い手の長い蜘蛛と、銀いろなめくじと、顔を洗ったことのない狸が、いっしょに洞熊学校にはいりました。洞熊先生の教へることは三つでした。」(「寓話 洞熊学校を卒業した三人」10・273)、「グスコープドリは、イーハトーブの大きな森のなかに生れました。お父さんは、グスコーナドリといふ名高い木樵りで、どんな巨きな木でも、まるで赤ん坊を寝かしつけるやうに訳なく伐つてしまふ人でした。／＼ドリにはネリといふ妹があつて、二人は毎日森で遊びました。」(「グスコープドリの伝記」12・199)のように、それぞれの舞台あるいは主人公の名称のほうは現われている。

このうち、「寓話 洞熊学校を卒業した三人」というタイトルの「卒業した三人」という表現も冒頭部分に出てこないが、テキスト末尾に「洞熊先生も少し遅れて来て見ました。そしてあ、三人とも賢い、こどもらだったのにじつに残念なことをしたと云ひながら

大きなあくびをしました。／このときはもう冬のはじまりであの眼の碧い蜂の群はもうみんなめいめいの蠟でこさえた六角形の巣にはいつて次の春の夢を見ながらしづかに睡って居りました。」(10・287)とあり、「蜘蛛となめくじと狸」がそれとみなされていることが明らかになる。

また、「グスコープドリの伝記」は、冒頭部分だけからではグスコープドリが「伝記」と称するにふさわしい人物あるいは生涯となるか否かは不明であるが、テクスト末尾で「そしてちやうど、このお話のはじまりのやうになる筈の、たくさんのブドリのお父さんやお母さんは、たくさんのブドリやネリといつしよに、その冬を暖いたべものと、明るい薪で楽しく暮すことができたのでした。」(12・229)のように普遍化されることよって、テクストが「伝記」というタイトルに見合うものになりえている。

第二は、テクストの全体あるいは諸要素を抽象的にまとめた語が含まれている場合である。「鹿踊りのはじまり」「バキチの仕事」「よく利く薬とえらい薬」における「はじまり」「仕事」「よく利く・えらい」がそれに相当し、テクストにそのままでは出て来ない。

「鹿踊りのはじまり」の冒頭部分には、「そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くな、めに苔の野原に注ぎ、すきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。」(12・87)とあり、「鹿踊り」の「はじまり」つまり起源がテクスト全体に語られる。「バキチの仕事」の冒頭部分には、「あ、さうですか、バキチをご存じなんですか。」／「知ってますとも、知ってますよ。」(9・403)とあり、それ以降にもつばら語られるのは、このバキチという男が関わった「仕事」の数々である。「よく利く薬とえらい薬」の冒頭部分には、「清夫は今日も、森の中のあき地にばらの実をとりに行きました。／そして一足冷たい森の中にはいりますと、つぐみがすぐ飛んで来て言ひました。／清夫さん。今日もお薬取りですか。／お母さんは どうですか。／ばらの実は まだありますか。」(8・266)とあり、その薬の「よく利く」エピソードと、それとは逆の、死に至らしめる「えらい」エピソードとが対照的に描かれる。

第三は、とくにテクスト上では重要性が認められない語が含まれる場合で、「林の底」の「底」、「山男の四月」の「四月」、「みぢかい木べん」の「みぢかい」が、その語に当たる。

「林の底」は、「わたしらの先祖やなんか、／鳥がはじめて、天から降って来たときは、／どいつもこいつも、みないち様に白でした。」

／「黄金の鎌」が西のそらにかゝつて、風もないしづかな晩に、一ぴきのとしよりの梟が、林の中の低い松の枝から、斯う私に話しかけました。」(9・260)で始まり、舞台が「林」、しかも「低い松の枝」とあるから、語り手の視点は林の下の方であるのは確かである。ただ、鳥との関係で取り上げられるのは上方の空であり、空から見れば「底」に当たるかもしれないが、この語はテキストには見られず、またそのように表現しなければならぬ理由も見出しがたい。

「山男の四月」は、「山男は、金いろの眼を皿のやうにし、せなかをかがめて、にしね山のひのき林のなかを、兔をねらつてあるいてみました。」(12・55)のように、「山男」がいきなりテキストに登場するが、その時期が「四月」であることを積極的に示す文脈は見当たらない。冒頭部分の「どこかで小鳥もチツチツと啼き、かれ草のところどころにやさしく咲いたむらさきいろのかたくりの花もゆれました。／山男は仰向けになつて、碧いあをい空をながめました。お日さまは赤と黄金でぶちぶちのやまなしのやう、かれくさのいゝにはひがそこらを流れ、すぐうしろの山脈では、雪がこんこんと白い後光をだしてゐるのです。」(12・55)という描写からは、「山男の春」としても差し支えないようにも思われる。

「みぢかい木ペン」は、冒頭部分の「キッコは一寸ばかりの鉛筆を一生けん命にぎってひとりでにかかわらひながら八の字を横(に)たくさん書いてゐたのです。」(9・396)や「キッコ、汝の木ペン見せる。」にわかに巡査の慶助が来て鉛筆をとってしまひました。」(9・397)から、それが「一寸ばかりの鉛筆」のことであることが察せられるが、その後も「みぢかい」という語自体は用いられない。ただし、明示されてはいないものの、その短かさ＝貧しさが不思議な力と結びつくこととして、タイトルにする際に付加されたと思われる。

16

以上、賢治童話のタイトルのありようを見てきた。その全体の主たる特徴を改めて確認すると、次の4点にまとめられよう。

- ・「名詞+の+名詞」を中心とする表現構成
- ・固有名とくに自然分野の造語の目立つ語彙

・テキストにも現われ、とくに冒頭部分に位置する出現分布

・ 主役あるいは舞台を示すテキスト機能

さらに、一般に、作品タイトルは他作品と識別するだけでなく、そのテキストの意味を示すという機能も持つとされるが、これら以外に、読み手の興味を喚起するという働きもあると考えられる。データに基づく検証にはなじまないもので、ここまで触れないできたが、賢治童話のタイトルには、それだけで興味をそそって止まない魅力があると感じられる。

たとえば、「名詞＋の＋名詞」という表現構成のタイトルに限っても、「グスコープドリの伝記」「マグノリアの木」「ガドルフの百合」「バキチの仕事」「ゼロ弾きのゴージュ」などという耳慣れない固有名を含むタイトルからは、いったいそれが何なのか、つい知りたくなるし、「銀河鉄道の夜」「チュウリップの幻術」「蛙のゴム靴」「鳥の北斗七星」「月夜のでんしんばしら」などの不思議な組み合わせのタイトルからは、それで何が起きるのか、すぐにもテキストを読まずにはいられなくなるのではないだろうか。大人でもそうならば、まして子供を惹きつけるのはまちがいない。

賢治がタイトル命名にどれほどの意図・工夫をこらしたかは詳らかにしない。中には、なぜこんなタイトルを…と思わなくもないものもあるとはいえ、少なくとも改稿に伴う変更や命名からは、ないがしろにしていたとはとても思えない。テキストのおもしろさは言うまでもないけれど、賢治童話のタイトルのことなら、またおもしろいのである。